

私の修行時代

トヨタ自動車を退職し
カンボジアでの地雷撤去活動に参加
あまりの無力さに鬱になり、
エルサレムでの祈りの生活から
参禅に目覚め、永平寺の門を叩き
出家するまでの顛末のお話し



島根県龍雲寺住職

野原真承

のほらしんじょう

昭和44年、岐阜県生まれ。昭和63年トヨタ自動車入社。平成7年カンボジア地雷撤去活動に従事。イスラエル等中東諸国巡礼を経て、平成11年4月8日福井県宝慶寺五十五世 田中真海老師に得度。駒澤大学仏教学部禅学科卒業。

阪神淡路大震災が、
全てののはじまりでした

私はトヨタ自動車の本社に就職し、計測技術部といって、車の部品検査をする検査機器を検査する精密測定の仕事に就きました。精密さを要求されるので、直射日光等で温度変化があつては計れません。常に温度は二〇度、湿度五五%という地下の職場でした。当時はクラウン等の高級車も大衆車を凌ぐほど売れていて、忙しくも楽しい毎日を送っていました。

そして、平成七年の一月、あの阪神淡路大震災が起きました。

住んでいた愛知県は、震源地からは遠うございましたが、それでもかなり揺れました。その日テレビをつけると神戸が燃えていました。若造としては何不自由ない生活でしたが、何か少しでも被災地のお役に立ちたいと、上司に相談しました。処、「それは良い心掛けだ、明日から二週間休みをやる、是非行つて来い」と。背中を押して頂き早速、現地の避難所になっている体育館へ駆け付けました。ここでは、被災者の人達が大人も子供も協力し

「生きる」ということに対する無知

合い、自分のことはともかく他人への配慮と
いうか、優しさというものが強く感じられて、
日本人って本当に素晴らしいなと思いました。
現地には台湾、ドイツやアメリカ、イギリス、
アジアの人達、いろんな国の方の姿がありま
した。日本語がわからない方々が一生懸命働
いている。この時、何か人としての普遍的な
真心に触れる事が出来たわけです。それは本
当に新鮮な感動でした。

二週間後、トヨタの職場に戻りました。非
常に恵まれた環境で、正直、何の不満もあり
ませんでした。ただ、一方で神戸の避難所で
受けた感動が忘れられませんでした。今まで
自分が知り得なかった世界を垣間見るような
ものだったと思います。自分が知らない、あ
るいは「生きる」ということに対する無知と
いうか、そういうものを自覚させられました。
すると、海外の事や、生死や哲学的な事に、
自然と心が向かうわけです。

そんなある日、自分が一番お世話になって
いた恩師の紹介で、カンボジアで地雷撤去の
活動をしている団体の代表の方と会うことが
できました。当時、カンボジアでは政府軍と
ポル・ポト派の内戦が漸く終結しかけたもの
の未だポル・ポトは健在で、地雷の被害とい
うのが深刻だったわけです。私も若い頃です
から、激的な活動の実情を聞いているうちに、

だんだん興奮してきて、「自分に出来る事が
あったら何でもやります」等と言っておりま
したら「あなたは若いし元気そうだから、じ
ゃあ来てくれませんか？」という話になりま
した。
それで「よしっ」と、もう自分の進路が決
まったような気になって、これこれこうい
うわけで、是非、カンボジアでお役に立てるよ
うに行きたいと思うのですがと、また上司に
相談しました。賛成も反対もあり、友人達も
同様でいろいろとありましたが、最終的には
自分で決断し、退職してカンボジアへ行く事
に決めました。



島根県浜田市 海蔵山 龍雲寺 夏制中安居の様子

カンボジアで、あまりの無力感から鬱状態に

自分の立場、己の力量をちゃんと自覚していたなら、爆弾が落ちようが銃声が響こうが、少なくとも目的意識が心身を支え、崩れなかつたかもしれない。しかし、いかんせんその時の私には、その国が混乱した原因も、また解決の糸口もなんにもわからない。ただ漠然と熱意だけで際限のない紛争や問題の中に飛び込んで行ったものですから、いちいち目の先の苦境に振り回されるわけです。視野が狭くて器が小さかった(苦笑)。そして、目の前の池で射殺されてブカブカ浮かぶ軍人達、地



法友のスリランカ比丘から贈られた仏旗の藤く龍雲寺山門

っていました。神様を求める思い、イエス様を求める思い、そして、それを私に伝えたいという気持ち、私はずっと頂いていたわけです。

帰国後、すっかり自信喪失し鬱状態に陥っている時、支えて頂いていた恩師の御導き、法友の言葉、カンボジアの彼から聞いたイエス様の福音を頼りに、どうせ日本でこのまま腐るなら、思い切ってイスラエルへ行こうと。病気のままの、ギリギリの決断でした。キリスト教とユダヤ教とイスラム教の聖地、イスラエルの都市エルサレムです。陰鬱とした状態でしたが、キリストに触れたいなら、イエス・キリストが生きておられたその地へ直接行こうと思ったのです。

イスラエルの聖地で一年半の祈りの生活

一人でエルサレムに到着。全く何も分かりませんから、まず、イスラム教の聖地「岩のドーム」へお祈りをさせて頂くように思いました。そこはキリスト教、ユダヤ教徒にとって最も神聖な場所です。朝から晩までお祈りしている姿があります。これは日本で普通は目にする光景ではありません。

その姿に触れて、ハタッと、自分は生まれてこの方、「本気でお祈りした事」がなかった

雷で血まみれの村人達を前にして改めて、「嗚呼、私には義侠心や情熱で勢いに任せて命のやりとりをする覚悟は確かにあるか知らんが、其処に智慧は無いな…、困った人達を助ける？大丈夫ですか？…いや、お前さんの一体どこが大丈夫なんだよ？恐怖は無いが中身も何も無い…」(苦笑) 今更ながら生死への無知と自己の傲慢さを感じ、絶望的な無力感を実感するわけです。そんな中、情勢の悪化や、組織内の問題もあり、何の成果も実感できぬまま半年余りで帰国することになります。

日本に帰ってきて安心したのか、あまりの無力感に、自分の存在意義まで失い、体調も崩し、そのまま消滅に向かう方が凄だと感じるような精神状態に陥りました。その時、思い出したのが現地で仲良くしていた青年のことでした。彼は親兄妹全てをポル・ポト派に殺されて、天涯孤独でしたが、とても陽気で、「シクロ」といってホテルから観光地へ客を運んだりしている人力タクシーで生計を立てていました。彼といろいろ話をしていたら、彼がクリスチャンだということが分かって、私に対し切々と、イエス様の福音を涙ぐみながら感動しながら、なぜ、自分が救われたのかを話してくれました。こちらも感動して、真剣な思い、切々たる真心はずっと私に伝わ

たと、改めて自覚しました。その時、本気で手を合わせたら、自信喪失し、何でこんなにつらい人生を生きていかなきゃいけないのか、生きる意味がない、とネガティブな方向しか生じなかつた思考の流れが変えられるかも？と、直観し、とにかくここでお祈りしよう、と思ったわけです。

イエス・キリストのお生まれになった馬小屋の教会、御墓がある聖墳墓教会、ゲッセマネの祈りという、十字架につく直前に、血の涙を流されて「私の思うようにはなく、御心のままに…」とお祈りをされた場所、他の聖地で、お祈りをしたり瞑想をしたり、そんなことをして結局、一年半ほどイスラエルに滞在し、すっかり元気になりました。しかし、たとえ本当に永住するにしても、一度は自己を観詰め直す為、また、今まで散々心配を掛けてきた両親と会って話す為にも帰国しよう



左から台湾、日本、スリランカ、ポーランド人僧侶と一緒に世界平和を祈り、鐘を響かせる 龍雲寺 平和の鐘にて

自分は生まれてこの方、「本気でお祈りした事」がなかった

「ここはお坊さんが修行する所で、 あなたの来る所じゃない」

と思いました。

帰国後、ご縁あって禅寺に参禅する機会がありました。そうしたら、「あなたの考えや思い、好き嫌い、あるいは宗教体験、そのものが大切なのではなくその執着を離れることこそ肝心です。」と、指導されました。

これは本当にその通りだと深く納得しました。そして参禅していくうちに、もつと真剣に、もつと本格的に坐禅というものを求め体得したいと思うようになりました。

いくら「坐禅を毎日しています」とか何とか言っても、本当にその中に入り切つて逃げ場のない処に自分の身を置かない限り、技術は高まっても執着は離れられません。都合よく「それぞれ事情と因縁がありまして」とか、そういう話で執着を肯定してしまい「今の自分では自己を否定し切れない」と感じました。この間までイスラエルで瞑想して、禅寺にちよつと通つたぐらいで坐禅をしているなんて言つても、そんなのは言つてみれば身勝手な修行者だつたんですね。

やっと永平寺の修行に たどりつきました

そこで、もちろんこういうことには恩師の御導きがあり、法友の助言もあり、その中で決断ですが、「ならば永平寺に入つて本気



晋山結制法要 お稚児さんと一緒に 龍雲寺本堂前にて

で修行をさせて頂きたい」と思いました。今度も何も知らずに永平寺山門へ行き「ここで出家修行をさせて下さい」と、雲水さんにお願ひしたところ「ここはお坊さんが修行する所じゃない」と言下に断られました。しかし、断られて帰るくらいなら最初から行きません。「お坊さんの修行する所であるなら、お坊さんにして修行をさせて下さい」と、「それは無理だ」と、こんなやり取りの繰り返しです。

雲水さんも困つたらしくて、とうとうご老師が出てくれました。そこで今一度「是非とも永平寺で出家し、一生参禅修行をさせて下さい、お願ひします」と申し上げました。老師は、「永平寺は全国の曹洞宗のお寺のお弟子方が、後継者となるべく修行をした後、お師匠さんの下へ帰るための役割が大きい、今のあなたにとって本当に良いかどうか。」黙つてお話を伺っていました。「しかしながら、地道に修行して、またそうした修行者を育てておられる道場もある、あなたにはそういう道場を紹介させて頂きましょう」と、全国の修行道場、あるいは参禅道場をいろいろと教えて下さいました。そして、「そういう道場で、まずあなたは、お師匠様を探してごらん下さい」と、本当に親切に御指導下さいました。

そして最初に、「ここは雪が深く大変だけど良い処だよ」と言われたのが宝慶寺でした。すぐに向かうと、本当に素晴らしい道場でした。そこで「ここで出家修行させて下さい」と懇願しました。そうしたら、いいとも悪いとも言われず、「様子を見よう」と。許可も何もないけれど、「参禅修行は許すからやってみなさい」という事でした。それがまた嬉しくて、毎日毎日見習い修行ということで、雲水さんと同じように喜んで修行させて頂きました。そして私の師匠からある時、「わしも四月の八日に出家得度を師匠から授かった、得度するか」と言われました。本当に有難くて「はい、お願ひします」と、四月八日に出家得度をさせて頂きました。これが私の出家までの経緯ということになります。(談)

深見六彦著『寂円さま物語』を5名の方にプレゼントいたします。仏教企画(下欄の送り先)まで、お名前・ご住所・電話番号・プレゼント名を明記のうえハガキでご応募ください。

平成29年2月末必着



読者プレゼント

曹洞禅グラフ137夏号プレゼント山口弘分老師の色紙は次の方が当選されました。

群馬県/新井栄子様 東京都/羽吹カヨ様
埼玉県/宮崎道子様 三重県/仲村隆彦様
愛知県/伊藤晃様

身近な人との心温まるふれあいや本誌への感想、仏教についての質問などを600字以内でお寄せください。Eメールでも受け付けております。

送り先.....
〒252-0113
神奈川県相模原市緑区谷ヶ原2-9-5-5
仏教企画編集部
Eメールアドレス.....
fujiki@water.ocn.ne.jp

お便り募集

読者からのお便り 新井栄子様

螢山禅師と道元禅師の偉大さ、「正月は新しい魂の祭・お盆は仏の命の祭」といろいろ教えていただき本当にありがとうございました。